恋人はストーカー

むさきち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋人はストーカー

【Ｎコード】
Ｎ２５４８Ｑ

【作者名】
むさきち

【あらすじ】
保険会社で事務をする春江は、日課のジョギングを通して１人の男と知り合い付き合い始める。順調に交際が進み１ヶ月ほど経ったある日、親友の信子から、その男が以前春江の家を監視していたストーカーに似ていると聞かされる。

第1章　　影

7月の初頭、木々の緑に夏の色彩が色濃くなると、此処、春江の住む水戸の地では、毎年8月の第1金土日に行われる黄門祭りが、卓上話題に上り始める。去年、職場の上司から「いつまで女同士で行ってるんだ？」と、からかわれたが、春江は、今年も信子と2人で行く事になりそうだと苦笑いした。

その晩春江は、この日に合わせて前もって作っておいたピザ生地を2つに分けると、1枚をしめじとアスパラを主力に植物系でまとめ、もう1枚を車海老をメインにシーフードで彩り、焼くだけの状態に整えた。共に信子の好物だ。

「あーさっぱりした！お風呂ありがとうね。あら美味しそう早く食べたい」

「先ず、髪乾かしてきたら？ドライヤー出てるから」

「そうね」

信子は今日28歳を迎えた。春江も同じ年で、誕生日は信子より2ヶ月ほど早い。2人は小学校以来の親友で、共に一人暮らしの気安さから何かにつけて行き来している。春江は水戸駅近くの生命保険の会社で事務を執り、信子はそこからいくらも離れていない美容室に勤めている。このアパートも信子の住んでいる所から5分とかからない。近いのとそれぞれ恋人がいないことが、2人の付き合いをより緊密にしていた。

ピザをオーブンに入れたところで、信子が硬い表情をしてキッチンに姿を見せた。

「ねぇ　ちょっと来て」

「どうかした？」

「通りの向こう側に、大きないちょうの木があるでしょ」

「ええ」
「そこを見て」
「どういう事？」
「いいから」
信子が急かせるので、春江はオーブンのタイマーを切り信子に続いて居間に入った。電気が消してある。
信子の言うままに腰を落とし、２枚合わせのカーテンを少し割って外を見た。通りを挟んで１本のいちょうの大木がある。単なる街路樹ではなく相当昔からある物で、そこだけ歩道が場所を取られている。
「何か気が付かない？」
「何？」
「電柱と、そしていちょうの木の影があるわよね。その隣にもう１つ別の影があるでしょう」
近くの街灯が、木の斜め後ろからその影を映し出している。
「あれ、何だと思う？」
「やだ　気味悪い事言わないで。人ってこと？」
「たぶん」
「看板かも知れないじゃない」
「看板だったら通行の邪魔になるわよ。木の向こう側だもの。それにあの影動いた」
「動いた？」
「さっき見ていた時、根元のところだけやけに太くて変だなと思ってたの。でも今は離れているでしょ」
木の影とその影との間には、確かにわずかな隙間がある。
「捨て看板か何かが木にくくられていて、風で動いているだけとか」
信子は納得しない様子で、
「気になるから私見てくる。春江ここから見てて」
そういい残すと、信子は部屋を出て行った。
春江は時々、信子の注意力に驚かされることがある。大雑把な性格

のようでいて、春江の小さな模様替えすらも見逃さない。以前、３０センチ動かしただけの壁掛けの時計を、何日かぶりに来た信子が首をひねって見ていた時には「旦那さんの浮気１日でばれるわね」と、笑い合った。信子はいちょうの木の後ろにある物が、人だと確信しているようだ。相手に気づかれないように、アパートから少し離れた所を選んで車道を渡ったのだろう。時間がかかりすぎている。９時を過ぎて人通りも無い。近くの国道の車の音はするが、目の前の車道は帰宅の車を迎え入れた後なのか静まり返っている。

やがて、いちょうの木の植えられているその歩道の右端の方に人影が見えてきた。街灯が近くなってそれが信子だと解った時、突然いちょうの木から人が飛び出した。　男だ。　男は足早に信子とは反対の方向に歩いて行った。信子は男の姿が見えなくなると、春江の暗い部屋に向かって手を振った。

「変態よ」

戻ってくるなり、そう信子は言い捨てた。

「このアパートの人を見てたのかしら？」

「もちろんそうに決まってるわよ」

春江の住む１階に４室、２階も同じで全てが埋まっていた。

「このアパートの誰かをストーカーしてる？それとも借金の取立てとか」

「ストーカーそして変態」

「決め付けるわね」

「だって、ハンカチに顔を埋めて匂いを嗅いでたのよ。たぶんオナニーでもしてたんじゃない」

「ちょっと、まさか」

春江はあまりに露骨な信子の言い方に思わず笑った。

「黄色いキティちゃんのハンカチよ。考えられる？」

ワインが開けられ春江自慢のピザとから揚げが並んだテーブルの上

で、ショートケーキにロウソクを3本だけ立てたささやかな誕生祝が始められていた。
「何か、変な事になっちゃったわね」
そう言いながら信子は、口の中のから揚げをワインで流し込んだ。
「黄色いキティちゃんのハンカチなんて、そうそう無いものね」
春江は空になった信子のグラスにワインを注いだ。
「盗られたのは、ハンカチとパンティーだけ？」
「たぶん　いえ、盗られたかどうかは解らないのよ　洗濯物を取り込む時に気づいた訳じゃないから。
ただ、いつの間にか無いなって思ったの。最近ね」
「でも、あの男が持ってるって事は盗られたって事よ」
「どんな男？」
「サラリーマン風、顔は普通よ」
「警察へ届けたほうがいいかな？」
「言うべきよ　きっと、パトロールを強化してくれるわ」
「又、来ると思う？」
「来るわよ絶対　時々注意して外見たほうがいいわよ。あと、魔除けに男物のパンツ干しておくとかね。思いっきりド派手な虎のプリントとかしてあるやつ」
「そんな事したらその男以前に、恥ずかしくてこのアパートの人に顔を合わせられないわよ。だいたい、男物のパンツなんて持ってないし」
「彼の、貸してあげようか」
「えっ、彼氏できたの？」
「冗談　できてたら此処に居ないわ。夜景の見えるレストランか何処かで、彼に祝って貰ってるわよ」
「あら　失礼しちゃうわね。私は彼氏が出来ても、彼べったりにはならないわよ。友達は大切にしなくっちゃ」
春江がおどけて返したので、信子も少し気が楽になった。残ったピザとから揚げを半分包んで、「明日食べて」と、持たせた時には、

既に１１時を回っていた。その夜、春江はなかなか深い眠りに入る事が出来なかった。いちょうの木から飛び出した男のことが思い出されては目が覚める。それを、もう何度と無く繰り返している。うぐいすがそう遠くない所で２・３度鳴き声を上げた。（朝になったのだろうか？）

枕もとの目覚まし時計を見ると、まだ3時にもなっていない。起き上がると、窓のカーテンを少し引いていちょうの木の辺りに目を凝らした。寝る前に見た時と同様、電柱といちょうの影がほぼ平行に伸びている。それ以外の影は無かった。

翌日会社が退けた後、駅前の交番に寄って事情を話した。

「注意してそちらをパトロールします。もし、又不審な男を見かけたら電話してください」

歳はいっているが、頼りになりそうなおまわりさんだった。しかしそれ以降、その不審な男がいちょうの木に身を潜む事は無かった。

第2章　　出会い

春江は朝のジョギングを日課としている。偕楽園に隣接する千波湖という湖の周りを毎日2周する。

公園化された湖や近くの梅園を見ながら走る事のできるそのコースは、1周3キロという手頃さもあってその周辺に立ち並ぶアパートやマンションのジョギング愛好家にとっては、格好のスポットとなっている。毎朝6時半に家を出て１０分掛けて千波湖公園まで行き、予定の周回をこなすと戻ってシャワーを浴び朝食を作る。そんな生活がしばらく続いている。その日も、走り終えて帰ろうとしていた時、傍らのベンチに座っていた男から声を掛けられた。

「コーヒーどうですか」

男は紙コップを手にしながら言った。横に小振りのポットと布製の

バッグが置かれている。
最近、走っている時に挨拶を交わすようになった。２０代後半だろうか？少しひ弱そうな感じはするが
印象は悪くなかった。２．３日前も勧められたがその時は断っている。春江は少し迷ったが、ベンチの方に歩み寄った。
「いいんですか？」
「どうぞ」
男はポットとバッグを自分の腰元に引き寄せた。春江は少し間を空けて座りコーヒーを受け取ると、さらに砂糖とミルクを用意している男に言った。
「ブラックで平気ですから」
「そうですか」
「お住まいは近くなんですか？」
「はい　すぐそこです」
「最近ですよね、走るようになったの」
「ええ　１週間位前からです。あなたは？」
「私は半年位になります」
そこまで話した時、男は急に居住まいを正すと「僕、清水圭介と言います」と、名乗った。
「伊藤春江です」
男が下の名前まで言ったので、春江もそれに習った。初老の男性が春江に軽く手を上げて走り抜けて行った。その前にも中年の女性が
「おはよう」と、声を掛けている。
「知り合い多いみたいですね」
「半年続けていると、ここで走っている人の顔は大体覚えました。でも、挨拶するくらいで、それ以上話したことはありません」
春江のコーヒーが残り少なくなったのを見て、清水がポットを取った。
「もう少しどうですか」
「もう結構です　美味しいですね　ドリップで入れたんですか？」

「はい　昔からコーヒーが好きで、コーヒーと煙草は欠かせません」
清水が、並びの良い白い歯を見せた。　春江はコーヒーを飲み干すと、礼を言ってベンチを去った。
２０分ほど居ただろうか、車道が賑やかになってきた
次の日も清水は昨日と同じベンチに座り、春江が走り終えるのを待ってコーヒーを勧めてきた。
「そんないつもじゃ悪いわ」
いいえ、いっぱい容れすぎて飲みきれないんです」
春江は、２日続けてご馳走になるのも気が引けたし、２人で座っていると知っている顔が時々意味ありげな笑みを浮かべて通っていくのも気になったが、そんな春江の思惑を他所に清水は既に新しいコップにコーヒーを注いでいる。春江は、清水が自分に好意を寄せている事を感じていた。清水の誠実な話し振りや振る舞いに、春江も少なからず惹かれるものがあった。何度かそうしているうちに、２人の距離は急速に縮まった。清水は決して多くを語るほうではない。春江が聞けば答えるが、話題の多くは春江の職場での出来事や実家のある会津の様子、学生時代の思い出などで、春江が一方的に喋るのを時々煙草をふかしながら嬉しそうに聞いている。

土曜日の朝、春江は水戸駅南口のロータリーに向かった。昨日の朝、清水からドライブに誘われていたからだった。バスやタクシーが激しく交錯する駅前から少し離れた道路上に車を停めて、清水は車の外で待っていた。そして春江を見て取ると嬉しそうに手を振った。
「いい車ね」
「レンタカーです」
「レンタカー？」
「車、修理に出してるものだから」
「だったら、直ってきてからでも良かったのに」
「いいんです　どうせ僕の車ポンコツで、春江さんを乗せるには恥ずかしかったから」

春江がシートベルトを締めるのを待って、清水はゆっくりと車を走らせた。昨日「何処か行きたいところありますか？」と、清水に聞かれた時、春江は迷わず「遊園地」と答えた。ディズニーランドか那須ハイランドパークかの選択になり、途中の景色も考慮して那須に決まった。車は北関東自動車道に乗る為に、水戸インターから常磐道を友部方面に向かっている。春江は昨年までは車を持っていたが、さして生活に不便が無いのとそれ程乗る機会も無いので手放した。無駄な駐車料金を払ったり、定期点検や車検の出費が不経済だと思ったからだった。どうしても必要な時は信子に借りている。

「清水さん　煙草吸わないんですか？」

1日2箱近く吸っている清水が、コンソールの横に置かれた煙草に一向に手を伸ばさないのを不思議に思って春江が尋ねると

「吸ってもいいですか？」

「いつも吸ってるでしょう？」

「いや、車の中だから」

「どうぞ　私、平気ですから」

「それじゃ1本だけ」

「私に遠慮しないで好きなだけ吸ってください。私、乗せて貰ってる身ですから。それに私の父も煙草好きで、小さい頃から煙には慣らされていますから」

清水は、笑いながらセブンスターを1本片手で器用に抜き取った。証券会社で内勤だと聞いたが、運転はかなり手馴れているようだった。

トイレ休憩に寄ったサービスエリアで、清水は手に余る荷物を抱えて戻ってきた。

「清水さん、お店でも開くんですか？」　春江が、笑いながら言うと

「いえ　着いてからお昼にしようと思うんだけど、少し遅くなるでしょう。それまでの繋ぎに」

フランク・串刺しのポテト・味噌田楽がそれぞれ2ほんづつ、ほかに缶コーヒー・キャンディー・スナック菓子まで買い込んできてい

る。
「これ全部食べたら、明日から1時間は走らなきゃならないわ。油断するとすぐ太っちゃうから」
「僕はいくら食べても太らない体質みたいで、いつも好きなだけ食べてます」
「いいわね。　清水さん、何がきっかけで走り始めたの？」
「考えてみたら、最近運動してないなと思って・・思い付きです。いつまで続くか解らないけど」

家並みが途絶えて、虫取り網を積んだ子供たちの自転車が数台、田んぼ道を駆け抜けていくのが見える。
収穫が近づいて、ところどころ風に倒された稲穂を起こしている農夫の姿もある。
春江は会津のことを考えていた。小さい頃、父に連れられて良く田んぼに行った。父が水の具合を見ている間、ザリガニや田螺・どじょうを探す。見飽きたら土手のれんげを摘んで花輪を作る。父は水回りが終わると、花輪が出来るまでれんげの上に寝転んで煙草を吸い始める。学校の様子などを聞いてくるが、春の柔らかな陽射しに耐え切れず大抵うとうとする。春江もつられて寝てしまう事が何度かあった。
その父も3年前に胃がんでこの世を去り、今は母と3歳下の弟が跡を取っている。

夏休み前にしては周辺の道路はかなり混んでいたが、1時半には目的地に着いた。清水は春江を制してフリーパスを2枚買うと、1枚を春江に渡した。
「食べてからにしますか？」
「当分、おなかすきそうに無いわ」
「そうですね、じゃ何から乗りますか？」
春江は、先ず3種類あるジェットコースターを順番に乗ってみよう

と提案した。春江は凡そそんな過激な乗り物の似合わない昔から控えめな性格だったが、カタカタと不安げな音を立ててゆっくりと坂を上がる時の緊張感や、息をも許さない落下時の圧迫感が大好きだった。清水はジェットコースターは苦手だと言いながらも春江1人を乗せるわけにもいかず、完全に主導権を握った春江が嬉々として次々に挑むアトラクションの数々に、及び腰ながらついてきた。子供づれの家族が多く、待ち時間の長いのが清水の救いだった。6時を過ぎて、清水の切望した観覧車に乗ったのを最後に帰途についた。

「ごめんね　私ばっかり楽しんじゃって」

「いいえ　1人では絶対乗りませんから、いい経験が出来ました。でも、驚きました。春江さん、普段と全然違うから」

「私ね、小学校の頃、学校の遠足で遊園地に行った時、友達にびっくりされたの。みんなしり込みするような乗り物に私1人で乗って、それでケロッとしてるでしょ。他の子がいろいろな乗り物を楽しむ中、私だけ同じジェットコースターに何回も乗ったりしてね」

水戸に戻ってレンタカーを返すと、駅ビルのレストランで昼食兼夕食をとった。南口を出て途中まで一緒に歩き、その晩はそれで別れた。

第3章　　疑惑

春江にとって信子は、単なる親友を超えたかけがえの無い存在となっている。

春江が小学校2年の時に、信子は製紙工場で働く父の転勤に伴い、春江の家からそう遠くない社宅に

引っ越してきた。クラスは違ったが登下校が一緒で、2人はすぐに仲良くなり、以来、中学・高校とお互いの家を行き来し合い家族ぐるみの付き合いを続けてきた。それが、信子が高校2年の時製紙工

場が閉鎖になり、信子の父は転勤を拒み実家のある茨城で生活する道を選んだ。それ以降、２人の交流手段は電話が主になったが、近況を報告したり悩み事を相談したりと、会津と変わらぬ関係を続けてきた。

春江は進学にあたって東京の私立の大学を考えていたが、信子が水戸にある短大の推薦が決まり１人暮らしすると聞いて、水戸にアパートを借りて東京まで通う事にした。卒業後は会津に戻るつもりで居たが、在学中に父が他界し会津で就職する必然性も無くなって、そのまま水戸に留まり水戸に支社のある大手生命保険会社に就職した。

春江の今の母は実の母ではない。生母は生まれつき心臓に持病を抱えていて、春江が８歳の時に亡くなった。その３年後に親戚の勧めもあって、今の母が５歳の男の子を連れて後添いとして入ってきた。母にも弟にも、これといって不満が有る訳ではない。寧ろ、多感な時期に居る春江を信子ともども良く気遣ってくれたと思っている。２２歳になる弟もじきに結婚するだろうし、たまに墓参りを兼ねて甥や姪に小遣いをあげに行くのが一番気楽かなと思っている。

週の半ばに、信子が車で春江の家に訪れた。西瓜やとうもろこし・トマトの詰まった段ボール箱を２度に分けて運び込むと、大げさに１つ息をついた。

「３０近くなると、体力的に下ってるのかなー　何か前よりもきつくなった感じ」

「運動しないからよ　　それより、こんなに貰っちゃっていいの？」

「春江ちゃんの分って、別に用意しといてくれた。それ、春江が植えた西瓜、中身は黄色」

「本当？まあ、しばらく見ない間にすっかり立派になっちゃって」

つぼにはまったらしく、信子は腹を押さえて笑っている。

５月に信子と一緒に信子の実家の笠間に遊びに行った時、ちょうど西瓜の苗を植え付けているところで、春江も何本か手伝わせて貰っ

ていた。春江は、信子の兄嫁が畑までカルピスを持ってきてくれた事を思い出した。
「帰る度に、ダンス教室へ通えだの、お見合いパーティーへ行けだのうるさくって」
「お母さんが？」
「父も母も、兄貴まで一緒になって言うから肩身狭いわ」
「私も同じよね」
「春江はいいじゃない　清水さんだっけ？　美容室じゃ待っててもも男来ないしなー。これで春江に結婚されたら滅多打ちにされそう」
「それじゃ、私が上手くいかないことを願ってるみたいに聞こえるじゃない」
「願ってません　私も必死になって男捜すわ。もうこうなったら、美容院やめて床屋にでも勤めるか」
信子は、決してもてないタイプではない、スタイルも顔も標準以上だ。男友達とも気安く話をするし、誰からも好かれる。ただ、それ以上の関係になり難いものを信子自身が作り出している。信子が口で言うほど男性に対してさばけていない、古風な一面を持っている。

その週の土曜日、清水との2度目のデートの為、春江は駅に向かっていた。9時の約束だが、先に切符を買うつもりで早めに家を出た。まだ20分ある。切符売り場に清水の姿は無い。バッグから財布を出そうとした時、背後に駆け寄ってくる音がした。
「春江さん　切符、買ってあります」
「清水さん何処に居たの？」
「マクドナルドの前です」
「何時に来たの？」
「ちょっと前に」
「今日は、私が全部出そうと思ってたのに」
「いいんですよ、それよりあと35分ありますけど」

「ホームで待ちましょう」
清水はロゴの入ったピンクの半袖のポロシャツに、白に近いベージュのカジュアルなスラックスを穿いている。春江は、この春買った薄いピンク地に桜の花が白く抜かれたワンピースを選んできた。他の人の目にはペアルックと映るかもしれないと春江は思った。スーパー日立に乗って上野で降りると、２人はそのまま動物園に向かった。
「清水さん　動物飼った事ある？」
「ありますよ　子供の頃からいつも家の中に猫が居ましたから」
「あら　私と一緒、私も猫大好き」
「猫といえば面白い話があって、実家は宮城の片田舎だから野うさぎとかも居るんですよ。僕が子供の頃の話ですけど、その時飼っていたのが牝猫でちょうど子供を生んだばかりの時、野うさぎを捕まえてきて
両耳だけ食べちゃったんです。その部屋いつも暗くって物置みたいに使っていたんだけど、僕、知らずに親猫だと思って撫でてたら本当の親猫が寄ってきたんでびっくりしました」
「それは驚くわね　そのうさぎ死んでたんでしょう？」
「ええ　でも捕まえてきて間もないのか、まだ暖かかったんで気が付かなかったんですね」
「猫って、獲物を捕って来ると飼い主に自慢してから食べるのよね。そのうさぎ全部食べちゃったの？」
「いえ　僕が食べました」
「えーっ」
「父がね、うさぎの肉は美味いんだぞって・・焼いてね。父と兄と僕で。さすがに母は食べませんでしたけど」
「そっちの方が驚きだわ　どんな味？」
「鶏肉のような味だった気がするけど、美味しかったですよ。そういえば蛇も何度か捕まえてきたなー」
「えーっ？それも食べちゃったの？」

「食べませんよ　春江さん僕の事何だと思ってるんですか」
清水が冗談っぽく怒ったのが、春江は可笑しかった。１つ年下の清水だが、そのせいばかりでは無いだろうがいつも敬語で接してきて、軽口を言ったのもこれが初めてだった。
サル山の前で立ち止まった清水が
「春江さん　僕、サルに噛まれたことあるんですよ」
「何それ、自慢？」
「はい　サルに噛まれた人って、あまり居ないでしょう？」
「まあね」
「伊豆の波勝崎にサークルの仲間と旅行に行った時ね、そこって野生のサルが集まってくるんですけど、
小猿が１匹居たんで興味をひかせるために煙草を１本取り出したんです。そしたらいきなり奪い取られて、小猿がそれを食べようとするから取り返そうとした瞬間、後ろから親猿に飛び掛ってこられてお尻をガブッと」
「それでどうしたの？」
「離れてくれるまで、じっとしてました」
「痛かった？」
「痛さよりも、恥ずかしさのほうが先にたって。観光客がみんな見てるから。考えてみると間抜けな絵ですよね」
「清水さん、今日はずいぶん饒舌ね。この前とは大違い」
「那須の時は、次に何に乗せられるのか不安でしたからね。今日は気が楽です」
「あら　この後、後楽園遊園地に行こうと思ってたのに」
「えっ？　渋谷で買い物するんじゃ・・」
「冗談よ　清水さん、顔がまじになってる」
「春江さん、意外と意地悪ですね」
清水が笑いながら言った。春江は、清水とならこの先ずっとやっていけそうかなと感じ始めていた。

園内で昼食を済ませ山手線の渋谷で降りると、２人は街を散策しながら何軒かのブティックを見て回り、春江は秋物のワンピースとカーディガン・仕事用のブラウスを2枚買った。清水は、品定めする春江の後ろを飽きるそぶりも見せずついてきた。春江の買い物が一段落すると、清水は途中の階にあった宝石店に春江を誘った。

「何かプレゼントさせて下さい」

「えっ？　いいわよそんな」

「あまり高いのは無理ですけど、１０万円位までなら」

そう言うと、強引に春江の手を引いて店に引き入れた。清水が何のためらいも無く手を握ってきたことに春江は驚き、結局清水に気圧される形で5万円のネックレスを選んだ。他に客が居らず若い女店員が付きっ切りで居て、何も買わずに店を出る事に気が引けたせいもあった。

「ごめんね　たくさん、お金使わせちゃって」

「もう少し高くても良かったのに」

「いいの　これが気に入ったから」

春江は、早速ネックレスを首にかけて見せた。

「どう？」

「似合います、とっても」

清水は嬉しそうだった。

春江は、今日買った服以外の支払いを全て清水にさせている事を、心苦しく思っていた。いつも先回りして払ってくれる、お金で渡そうとしても受け取ろうとしない。（これまで清水が出してくれた金額に見合うものを、何かプレゼントしなくては）と帰りの電車の中で考えていた。

水戸に戻って、やはり駅ビルの前とは違うレストランで食事をし駅南の道を歩いていると、突然、清水が

「送っていきます」と、言ってきた。少し先のコインランドリーの処で別れるものとばかり思っていた春江は、一瞬戸惑ったが断る理

由も無かった。
「ありがとう」
動揺を隠そうとして素早く言ったつもりが、全く感情のこもっていない単なる無機質な5文字の羅列となった。春江は、今、口にした言い方を悔やむ一方で、部屋の状態も気になっていた。食器の洗い物がそのままになっている。出掛けの残った時間を、コーヒーを入れるか食器を洗うか、つまらない選択をした事を悔やんだ。「人間はいつ何処で死ぬか解らない。常に綺麗な下着を身に着け、部屋の中は誰が来ても恥ずかしくないように」　父の口癖だった言葉が追い討ちをかける。彼は部屋を見たいと言うだろうか？もし言わなくても、さんざん散財させておいてお茶の一杯も出さずに帰したのでは非礼すぎる。コーヒーだけ出して帰せばいい、それ以上の関係になるには早すぎる。
不自然な沈黙を清水も破ろうとはしない。ただ、黙ってついて来る。何か話さなくてはと考えていた時、春江の携帯が鳴った。
「デート、どうだった？」　信子だった。
「まあまあ」
隣に清水が居る事を知らない信子が、何を言い出すか不安だった。
「まあまあって、今日2回目でしょう？行くとこまで行っちゃった？」
悪い予感が当たった。清水に聞こえているだろうか？春江は携帯を耳にピッタリと押し当てた。信子と
2人だけならどうという事の無い会話だが、清水が隣に居るとなると話が違ってくる。
「今、一緒。　家まで送ってくれるって言うから」
多少、声を荒げて言った積もりだった。
「それでか　何か、そっけないなって思ったの。お楽しみはこれからか。私ね、いつものコンビニに来たところ。もう、ここ過ぎた？」
「まだ」
「じゃ、ちょっと寄ってよ。彼のこと紹介して」

「解った　じゃあ」
これ以上何か言われる前に、春江の方から　電話を切った。
「誰？」
「友達　前に話したでしょう？　信子」
「ああ、一番の親友だって言ってた面白い人」
春江はこれまでに何度か、信子のあけすけなところを清水に話している。
「ごめん、ちょっとそこのコンビニに寄っていくわね」
清水に断って店に入ると、信子は２・３人の客に混じって雑誌を読んでいた。
「やあね、変な事言わないでよ。私、冷や汗かいちゃった」
「ごめんごめん、ところで王子様はいずこに？」
全く意に介すことなく笑っている。春江が視線を表に移すと、清水は入り口付近で背を向けて煙草を吸っていた。
「後ろ姿、９０点」
信子は完全に楽しんでいる。
備え付けの灰皿に灰を落とす為に清水が体の向きを変えた時、春江が聞いた。
「どうしたの？」
「うーん、別に」
「別にって・・、おかしいじゃない。信子はすぐ顔に出るんだもの」
気色ばんだ春江の口調に、一つ先で本を読んでいた男が一瞬首を向けた。春江は信子を見据えたまま、次に信子の口が開かれるのを待っている。信子は、こういう時の春江は絶対に引かない事を知っていた。
一つ息を吐いて、信子は言おうかどうか迷っていた言葉を口にした。
「誤解しないでね。私、確信がある訳じゃないからね。ただ、似てるなって思ったの。あの晩の男に」
清水が振り返った瞬間信子の顔色が一変したのを見て、春江にとって好ましくない何かがあるのは察しがついたが、半ば忘れかけてい

た2ヶ月前のあの男に話が及ぶとはまるで予期していなかった。
不意を打たれた春江は言葉を失った。
「見たのは横顔だけだし、全然自信ないの。気に障ったらごめんね。気にするわよね、本当にゴメン」
凍りついた表情で立ち尽くす春江を何とかなだめようと、信子は必死に弁解した。
「本当なの？」
春江はかろうじて口にした。声が震えている。
「だから、一瞬そう思っただけだって」
信子がいくら弁解しても、春江の慰めにはならなかった。清水が灰を落とした後、顔を上げて店の中の春江の姿を探そうとした時、信子は反射的に顔を背けた。それまでの笑顔が、一瞬のうちに何か恐ろしいものでも見たような顔付きに変化していた。「あの時の男と、似てる」程度ではない。確信しているのだ。　「本当にごめんね、楽しいところを水を差すようなこと言っちゃって」
「私もう彼と一緒に帰れない」
他人の目がかろうじて春江の理性を支えてはいるが、涙声になっている。
「違うわよ、絶対違うって。もう何度も会って、彼がどういう人か解ってるんでしょう。きっと私の思い違いよ」
「さっきの信子の表情を見たら、とても思い違いとは思えないわ」
「何度も言うけど、私の見たのはほんのチラッと。それも横顔だけなんだから。世の中に似てる人はいくらでも居るわ。　ねえ、あんまりここで揉めてると変に思われるから、とにかくここは家まで送って貰って、それですぐ帰せばいいじゃない。私、後をついていくから」
他に客が居なくなって、店員が商品の整理を始めだした。春江は黙って頷くと気を静めるためにトイレに入り、レジで精算している信子と視線を交わすと店を出た。
清水は、新しい煙草に火を点けているところだった。

「ごめんね」
春江はそれだけ言うと歩き始めた。何の会話も無く歩いている点は、コンビニに入る前と一緒だ。しかし全く意味合いは違う。今、春江が清水に語りかけるとすれば、あの時の男か否かその一点だけで、他の会話はその問題が解消されて始めて成り立つ。しかし、さすがにそれを聞く事はできない。
「知り合い？」
何の説明もしない春江に、清水のほうから声をかけた。
「うん、友達」
「友達、多いね」
どうやら信子からの電話は、聞こえていなかったようだ。不自然な沈黙が続いた。春江の頭は混乱を極めていた。彼のこれまでの行動に、全く不信感は無かった。信子の言う通り、もう3週間近く朝は湖畔のベンチで彼の入れたコーヒーを飲み、話しをし、彼の人柄はある程度理解したつもりでいた。実直で誠実、
軽はずみに浮かれたりする事も無い。難を言えば少し消極的過ぎる事くらいだろうか。春江は清水との出会いを振り返っているうちに、1つ気になる事を思い出した。それは互いのことを話している時、それまで仕事や趣味の事では細かいところまで聞いてきた清水が、春江のアパートの話になるといやにあっさりと他の話題に移した事だった。その時は特段気にも留めなかったが、部屋の様子や隣室の人達の話しをしようと思っていた矢先だったので、ちょっと気を削がれた思いがした。それは、清水が春江の家の様子を既に知っていて、聞く必要が無かったからではないのか。或いはストーカーの事を持ち出されるのが嫌だったのか、そんな風にも取れる。どうやって確かめればいいのだろう？春江のアパートが近くなってきた。信子は、離れてついてきているに違いない。ジュースの自動販売機を間に挟んだY字路を右に曲がった時、「そっち？」と、清水が初めて聞いてきた。
「本当は左の方が近いんだけど、最近事故があって気味が悪いから」

咄嗟に口についた出鱈目だった。清水は軽く微笑んで頷いた。
アパートの前まで来た時、春江はきっぱりと言った。
「今日は、本当にありがとう　すごく楽しかった」
春江の態度に付け込む隙がないと感じたのか、端からその積もりが無かったのか、清水の表情に失意の色は無かった。
「うん、僕こそ本当に楽しかった。明日も、ジョギング来るでしょう？」
春江は小さく頷いた。
「じゃ、又明日、おやすみなさい」
清水は背を向けると、振り返ることなく、春江の視界から消えた。
替わりに、何処で見ていたのかすぐに信子が現れた。
部屋に入ると、信子はテーブルに置いたレジ袋からバニラアイスを2つ取り出した。
「おとなしく帰った？」
「拍子抜けするくらいあっさりね」
「そう」
「ただ、一つ気になった事があった」
「何？」
「遠回りしたでしょう？彼が私の家を知ってるとしたら、Y字路を逆に行けば何か反応を示すかなと思ったの」
「そういうことか　それで、彼何か言った？」
「「そっち？」って、その言い方がいつもの彼の言い方じゃなくて、咎めているように聞こえた。それまでは黙ってついてきたのにそこだけ聞くって変よね」
「確かにそうね」
春江は考え込んだ。信子は空になったアイスのカップに水を入れると煙草の火を点けた。
「素敵ね、彼のプレゼント？」
変形のハートをあしらったホワイトゴールドダイヤのネックレスが信子の目に留まった。

「今日買ってくれたの。素直に喜べないわ」
「そうよね」
「私には、彼があんな事をする人だとは、どうしても思えないの。でも信子が彼を見たときの反応は普通じゃなかった。もし彼があの時の男だったら、この先の付き合いは絶対にありえないわ。信子、正直に言って。本当はどうなの？」
「体型はあんな感じ　横顔はかなり似てる」
コンビニでの慰めが本心でない事は解っていたが、改めて言われると余計に心が重くなった。
「彼、勤め先はｘｘ証券だって言ってたよね」
「そう」
「家も近くだって聞いたけど、何処？」
「南口を出て千波湖の方に行く途中、左側にコインランドリーがあるでしょう。その路地を入った正面のビル」
「ひょっとしてサンライズハイツ？」
「えっ、何で知ってるの？」
「辰巳っていう炉端焼きの店に、前に行ったでしょ。そこに美保ちゃんってアルバイトの娘居たじゃい」
「ｘｘ大学行ってる娘ね」
「そう、その娘がね、私の美容室に来るようになって、いろいろ話してるうちに気が合ってさ。今度遊びに行く事になってるの」
「あの娘、実家から電車で通ってるって言ってなかった？」
「辰巳のバイトでお金貯めて一月ほど前に部屋借りたの」
「何階に住んでるのかな？」
「さあ？それは聞いてないけど、彼は何階？」
「一番上だって言ってた」
「行った事無いの？」
「誘われてないもの」
「彼のこと聞いてみようか　知ってるかどうか解らないけど」
「私の名前は出さないで」

「解ってる」　信子は、携帯を開いた。
「もしもし、こんばんわ　サチ美容室の信子です」
「ああ　信子さん　この間はありがとうございました。この髪型すごく気に入ってます」
「いえ、こちらこそいつも指名して貰って。ところでさ、ちょっと聞きたい事があるんだけど」
「何ですか？」
「美保ちゃん、何階に住んでるの？」
「近くに居るんですか？だったら来てください」
「そうじゃなくて、ちょっと知りたい事があって」
「５階です」
「そこ、何階建て？」
「５階建てです」
「そう、それじゃその階に、清水さんって言う独身の男の人が住んでいるんだけど知ってる？」
「名前は知らないけど、２０代半ばか後半ぐらいの人は１人居ます」
「そうその人、その人どう？」
「どうって？」
「何ていうか、普通の感じの人？それともちょっと変わってるとか」
「信子さん、興味あるんですか？お見合いの相手だったりして」
「私じゃないんだけど、私の友達に話しがあって・・まあ、そういう事」
「なら、止めたほうがいいですよ」
「どうして？」
信子は春江の顔を見た。美保の声は聞こえているらしく、即座の否定に面食らった様子だ。
「私、エレベーターとか玄関先で、その人が女性と一緒のところを３・４回見た事あるんです。それが
毎回相手が違うんですよ。私、まだここに来て１ヶ月ですよ」
春江が、不思議そうな表情で信子を見た。

「もてるのね」　信子が言った。
「いいえ、良く解らないけど、そういう商売の女性じゃないですか。だってもてるタイプじゃ無いですよ
背は低いし、太ってるし」
「違う、その人じゃない」
「でも5階には他にいませんよ。私、ここに越した時、5階の人だけにはタオル配ったんです。ここ1Kだから殆どが1人暮らしなんですけど、1軒だけが年配の夫婦であと2軒は30過ぎの女性、それと今言った男ですから」
春江が指を4本立てた。
「4階はどう？」
「さあ　他の階の人はちょっと解りません」
それを聞いて、春江はもういいという風に首を縦に振った。
「ありがとう　ごめんね、変な事聞いちゃって。今度、寄らせてね」
「待ってます」
無邪気な美保の声を残した電話をゆっくりとたたみながら、信子は春江にかける言葉に迷った。
「他の階の人は知らないって」
そして、聞こえているはずの言葉を繰り返した。
「考えてみたら、他のビルはあっても他の階って事は無いの。「5階だと、夏、窓を開けておいても蚊が入って来ないんじゃない？」って、聞いたの。だから5階は間違いない」
「他のビルはあってもって、どういう事？」
「ジョギングした後途中まで一緒に帰るんだけど、私と別れた後、コインランドリーの所を入っていくのは知ってたの。最初のデートの時帰り道そこを通ったから、どの建物か聞いたの。そしたらサンライズハイツの方を指差して「あれです」って。サンライズハイツって名前も彼から聞いたんじゃなくて、その後
用事でそこを通ったときに知ったの」
「それじゃ、彼が他のビルを指してたって事もありえるわけ？」

「まあね、絶対に無いとも言い切れないけど、でもちょっと無理があるかな。それに始めて会った時だって、「家はすぐ近くです」って言ったきりそれ以上言おうとしなかったし・・・何ていうか、彼、そういうタイプじゃないのよね。あまり喋らないけど、相手の知りたい事に対して丁寧に答えるほうなの」
「じゃ仮に、彼が家を隠してるとしたら、その理由は何？」
「そうね　奥さんが居るとか」
「ありえるよね　それとも、あまりにボロっちい所で正直に言えなかったとか」
「車の事ではそんな事言ってたわね。謙遜かもしれないけど」
信子は2杯目のコーヒーを自分で入れると、煙草に火を点け一つ大きく吸い込んだ。
「ねえ、先ず悪いほうから考えて、彼が例のストーカーだとしてよ。当然、春江に近づくためにジョギングを始めたってことよね」
「そうね」
「目的達成だものね。家を隠す必要は無いわね。彼があのストーカーと別人だったとして・・・それでも
同じか。どっちにしろ家を隠すって事は来てほしくないってことだから、奥さんなり女の人が居るって考えるのが普通よね」
「信子、明日車あいてる？」
「いいけど、どうして？」
「つけてみる」
「尾行？」
「そう」
「私も付き合おうか？」
「明日、仕事は？」
「先週の日曜は出たから、明日は休めるんだ」
「本当？ありがとうそうしてくれると心強い」
それから2人は、翌日の事を打ち合わせた。

第４章　　追跡

翌日、約束の６時５０分に信子は愛車の黒のＢＢでやってきた。
「時間通りね」
「何？その格好、まるで怪しい女ね」
助手席に乗り込む春江を見て、信子が言った。白のキャスケットを目深に被り、サングラスにマスクまでしている。
「車の中だから大丈夫だと思うけど、万が一ね」
「彼、もう来てる？」
「もう走り終えてる頃　いつも私より早いから」
日曜の早朝とあって、走っている車は殆ど無かった。千波湖に着くと、春江はシートを倒した。
「ここを道なりに行って、左側に駐車場があるでしょう。そこに入れて」
信子は湖を正面に見るために、バックで駐車した。既に３・４台停まっている。
「ここからベンチ見えるでしょう？」
春江は身体を倒したまま、顔だけを信子に向けた。
信子は前方を見回した。駐車場の前には今通って来た車道があり、つつじの植え込みを挟んで車道と同じくらいの幅の歩行者・自転車共有道路がある。いつも春江が走っている所だ。さらに植え込みを挟んで湖沿いに遊歩道があり、背もたれの無い木製のベンチが湖を巡らせて何十箇所も設けられている。道路を隔てるつつじの合い間合い間に種類の異なる桜の木が植えられ、伸びた枝葉がベンチに日陰をもたらせている。

少し離れた左手のベンチに、男の背中が見える。
「あれかなー？春江、大丈夫よ、今向こう向いてるから」
春江は身体を起こすとすぐに倒した。男が振り向いたからだ。
「そうよ」
「あれか　落ち着きが無いわね。きっと春江のこと探してるのね。
あっ、今、何か飲んだ」
「コーヒーよ」
「そこから始まったんだっけ。あっ、又振り向いた」
信子が逐一報告するのが可笑しくて、春江は思わず笑った。（信子が一緒でよかった　一人で来ていたら今どんな思いで居ただろう）
信子が探偵の真似事をして楽しんでいるのが救われた。その間にも、何人もの人が歩道を走りぬけて行く。
「結構居るのね、こんな時間に走ってる人が。私はその分寝てたほうがいいな」
「私だって信子みたいに細ければ寝ていたいわ」
「いつも何時まで走るんだっけ？」
「7時半まで」
車の時計は7時20分を表示している。
「何か探してるみたい。携帯よ。きっとかかってくるわよ」
その直後、春江の携帯が鳴った。
「どうするの？」
「出ない」
呼び出し音はちょうど10回で切れた。清水は煙草を取り出して、何も無い湖面に煙を吐いた。湖越しに電車の通る音がする。
「7時半過ぎたわよ。あきらめて帰るかな？それとも春江の家まで行くか」
「私の家には行かないと思う」
「でも、今日日曜よ」
「それでも・・」
「春江、彼立ち上がった。ポットをバッグにしまってる。歩き始め

た」
「そしたら、前の歩道を駅に向かって行くから、正面を通るわよ」
「今、正面に来た。ちょっと待って！！　こっちへ来るわよ」
「えっ」
春江は思わず身体を起こそうとした。清水が植え込みの切れ目から、車道を渡るために左右を確認している。
「どうして？私に気がつくはず無いよね」
「解らない　こっちに向かってる」
信子は、ドアの内側に挟んである女性雑誌を春江に渡した。
「これ顔に被せて」
春江はあわてて雑誌を開くと、顔を覆った。
「車よ、車で来てるのよ」
「車？」
清水との距離が近いのだろう　数十秒の沈黙が続いた。春江は雑誌の作る暗闇の中で、息を呑んだ。
突然、すぐ横で激しくドアの閉まる音がした。その車の動き出す音が聞こえた時、信子が口を開いた。
「大丈夫　出るわよ」
清水は駐車場内で車を前方に向けると、左へウィンカーを出した。信子はエンジンをかけ、清水の車が曲がりきった後、急いでその後を追った。
「もう起きて平気よ」
春江はシートを起こした。信子の車は駅とは反対の方向に向かっている。
「まさか、隣の車だったとわね。心臓が止まるかと思った。彼の車前方駐車だったでしょう。私のすぐ横を通っていくんだもの」
「信子が雑誌取ってくれて助かったわ。彼、私の事見た？」
「見たわよ　私のことも見てたもの。ねぇ、その服彼の前で着たことある？」
「無いのを選んできた」

「じゃ、多分ばれてないわね。駅とは逆ね、春江の家には行かないわね。彼、車で来た事あるの？」
「初めてよ」
春江はサングラスを外した。白いエスティマが５０ｍ先を走っている。
「あの車ね」
「その一つ前、紺のプレディア。土浦ナンバーよ」
「土浦ナンバー？」
エスティマの先に、見覚えのあるテールがあった。
「他に紺色の車あった？」
「あれだけよ　どうして？」
「その車いつもあそこに停まっているから、ジョギングに来た人のじゃなくて近所の人が駐車場代わりにしてるのかなと思ってたの。でも、それにしては土浦ナンバーだしと思って」
「それじゃ、春江と一緒に歩いて帰る振りをして、別れた後又駐車場に戻っていたって事？」
「そうなるよね」
「いつ頃からその車に気が付いたの？彼がジョギングに来るようになってから？」
「そうだと思う。前は無かった」
春江はその理由を考えた。車で来ていることを知られたくないとしたら、土浦ナンバーだからだろう。　最初のデートの時レンタカーを借りたのも同じ理由からだろうか、他に考えられなかった。
「前の車遅いなー　年寄りかな？どんどん離されちゃう」
信子は苛立たしげに言いながら、前の車との間隔を詰めた。
「信子、彼、ウィンカー出してるよ。高速に乗る気じゃない？」
「えーっ高速？どうしよう　私、高速乗った事無い」
「本当？でも大丈夫よ。高速のほうが却って楽よ」
「でも高速って１００キロくらい出すでしょ。私、そんなにスピード出した事無いもの」

清水の車は、北関東道の入り口を入っていった。
「ねぇ春江、運転替わって」
今にも泣きそうな声を出した。
「だめ、私、免許証持ってきてない。それに、替わってたら見失っちゃう」
信子は戸惑いながらも、高速の入り口を入った。料金所でチケットを取る手が震えている。
「ここはゆっくりでいいのよね」
「いいのよ　本線に乗る時だけ、気を付ければ平気だから」
幸い、走っている車は少ない。
「本線に入るわよ　スピード上げて」
「車来てないよね　春江も見てね」
信子は何度も後方を確認しながら本線に乗った。清水の車が豆粒のようになっている。強張った顔でハンドルを握りしめ、何とか前の車に追いつこうと懸命にアクセルを踏んでいる。
「今、何キロ出てる？」
目を放す余裕は無かった。車線をはみ出さない事と、前の車に追いつく事だけに全神経を使っている。
「１２０キロ」
「１２０キロ？　緊張して脚が震える」
「大丈夫、信子は上手よ。初めてなのにすんなり本線に入れたし、私より上手いわ」
「春江、バッグから煙草取って」
「吸うの？大丈夫？」
「その方が、落ち着くと思う」
春江は信子のバッグからラークマイルドとライターを取り出すと、信子の口にくわえさせて火を点けた。
煙草が小刻みに揺れている。
「点いた？」
信子は２・３度吸って確かめると、わずかに首を縦に振り、すぐに

「ウーウー」と唸り始めた。春江はすばやく煙草を抜き取ると、灰皿に灰を落とした。
「ありがとう　もういいわ。何か逆に落ち着かない」
後ろから来た車が、隣の車線を猛スピードで走り抜けていく。
「今何キロ出てる？」
「１１０キロ」
「１１０キロも出してるのに、あんなに簡単に追い抜いていくの？高速ってみんなこんなにスピード出してるの？」
「そんな事無いわよ。左車線で、８０キロくらいでのんびり走ってる人だって居るわよ」
「そうよね、それだって信号が無いんだもの充分よね」
清水の車も１１０キロ前後で走っているらしく、先程から大きさが安定している。
「少し落ち着いた？」
「うん、前から車が来ない分だけ楽かもね」
やっと信子の口元に笑みが浮かんだ。
「この先、友部で常磐道とつながるのよね。土浦ナンバーって事は、東京方面かな？」
春江もその事を考えていた。家へ向かっているのか、日曜だから別の場所という事もありえる。
「彼、毎日高速に乗って春江に会いに来てるのかな？それとも今日たまたま高速を使って何処かに行こうとしてるのかどっちだろう？」
「土浦ナンバーをそのまま信用すれば、土浦とか筑波・取手あたりに家がある可能性もあるわよね。でも、土浦ナンバーだからって水戸に住んでないとは限らないしね」
友部のジャンクションに差し掛かって、清水の車は常磐道を東京方面に乗り、信子は2度目の合流を、前よりも落ち着いてこなした。
その直後、清水の車のウィンカーが点滅を始めた。
「サービスエリアに入る気よ。良かった、私、さっきからずっとおしっこ我慢してたの」

車を止めると、信子は急いでトイレに駆け込んだ。清水はまだ車の中に居る。その時、春江の携帯が鳴った。画面に清水の名前が表示されている。春江は迷った。もし清水が電話の為だけに寄ったのだとすれば、春江が出なければ、信子が戻る前にここを離れてしまうかもしれない。考えている内に前と同じ回数で音は止んだ。もし車を走らせようとしたらこちらから掛けるしかないと腹をくくった時、清水の車のドアが開いた。春江は深い息をついて携帯を閉じた。信子はトイレを出て清水の車を確認すると、缶コーヒーを2本買って車に戻ってきた。

「良かった、間に合って。男の人ってトイレ早いからね」

「又、電話かかって来た」

「出なかったんでしょ　又、１０回？」

信子は、笑いながら煙草の火を点けた。

「メールは？」

「教えてない」

清水はトイレから出ると、信子が買った販売機でやはりコーヒーを買っている。

「コーヒーは、ポットの中にいっぱいあるじゃない。春江の分まで」

信子がふざけて言った。

「ここでコーヒーを買うって事は、まだ先はあるわね」

春江は、清水が1日に缶コーヒーを何本も飲む事を聞いている。ドリップで飲むのはブラックだが、キンキンに冷えた砂糖入りのショート缶も好きだと前に言っていた」

「まさか東京まで行くって事は無いよね。私、東京の道路なんて絶対無理よ」

清水の車が動き出した。信子は缶コーヒーを一気に飲むと煙草の火を消した。土浦を過ぎて、多少車の量が増えてきている。清水の車を追うために途中何台か前の車を追い越して、信子はかなり余裕が出来て今は春江の手を借りずに煙草を吸っている。千波湖を出てから５０分が経っていた。

「春江、彼降りるわ」
清水の車が谷和原インターの出口に進路を取った。
「水海道、守谷その辺り？」
春江が用意した料金を受け取りながら、信子が聞くとも無く言った。
「そう言えば昨日、そのうち守谷に転勤になるようななこと言ってたな」
守谷の町まで来ると、清水の車は国道から離れて瀟洒な住宅の立ち並ぶ市道へと入り、そこから2・3km先のマロニエの木で覆われた一角に吸い込まれた。そして、白い2階建ての建物の駐車場に車を入れた。清水が車から離れるのを待って、信子もゆっくりと駐車場に車を滑らせた。
20台ほどのスペースがあり、番号が振ってある。日曜のせいか殆どが埋まっていた。車を徐行させながら2人は清水の動きを追った。清水は外階段を使って2階へと上がり、上がってすぐの部屋で立ち止まるとドアノブに鍵を入れた。清水の部屋が正面に見える位置に車を向けた時、ドアが開いて中から5・6歳の男の子が姿を見せた。その後ろで、エプロン姿の女性が笑顔で何か言っている。男の子の背中を押しながら、清水は中へ入っていった。2人は閉じられた部屋のドアに視線を置いたまましばらく居た。
先に口を切ったのは春江だった。
「帰ろう」

「いいの？」
信子はゆっくりとアクセルを踏んだ。その時、建物の入り口に設置された集合ポストが目に入った。
「春江、ちょっと待ってて」
駐車場ナンバーのポストを確認した信子はすぐに戻ってきた。
「名刺が張ってあった。清水圭介xx証券守谷支店、古い名刺よ」
「いきましょう、馬鹿みたい。何が近いうちに転勤よ、既に守谷に住んでるんじゃない」

「ばれる前に予防線を張っておく積もりだったのね。という事は、ここ1ヶ月毎日高速を使って春江に会いに日参して立って事よね。時間だってお金だって相当なものじゃない。春江、余程気に入られたのね」
「でも、最初どこで私を見かけたんだろう？水戸の人なら解るけど、ここじゃ接点が無いものね」
「そうね、それも不思議だけど、どうやって奥さんに言い繕ってたの？片道1時間かかったでしょう、往復で2時間」
「それに公園に居る時間も合わせると3時間近くね」
「そうか　それで帰ってきた彼を笑顔で迎えるんだから、間抜けな女ね」
「ねぇ信子、お腹すかない？筑波に千円で食べ放題のピザ屋さんがあるんだけど、行かない？」
「いいわね、行こう」
その日は、それ以降清水の電話は無かった。

第5章　　千波湖

その翌日、春江はジョギングに行かなかった。7時を過ぎたあたりで清水から電話があったが無視した。さらに昼と夜にかかってきたが、春江はもう清水からの電話に出るつもりは無かった。火曜日、仕事を終えた春江がいつも通り駅を抜けて南口の駅前広場を歩いていると、呼び止める者があった。清水だった。
「春江さん、どうしたんですか？」
春江は、一瞥すると清水を置いて歩き出した。
「春江さん、訳を言ってください。どうして電話に出てくれないん

ですか？」
構わず歩き続ける春江の後を、清水も早足でついてくる。
何度目か自分の名前を呼ばれた時、春江は急に立ち止まって振り向いた。広場は仕帰りの人でごった返している。
「ハンカチ、返して」
予想もしなかった春江の言葉に、清水は小さく「えっ？」といったきり立ち尽くした。
「持ってるでしょう？知ってるの」
清水は困惑の表情を浮かべたまま声とも取れぬ音を発したが、やがて観念したように言った。
「今、持ってません」
「何処にあるの？」
「家に」
「家？どこの家？案内して」
清水は又押し黙った。人ごみの中で立ち止まっている2人に、通行人が不快そうな視線を投げかけて行く。
「私、嘘をつく人大嫌い。2度と私に近づかないで」
それだけ言うと、春江は歩き出した。清水がついてくる気配は無かった。

その週の金曜日、信子がワインを片手に春江の部屋を訪れた。
「良かったじゃない。又、新しい出会いを見つける事ね」
「又、スタート地点に並んじゃったわね」
春江はキャベツを刻む手を止めて、信子を見た。
「信子、何？ニヤニヤしちゃって。私のほうがリードしてるって顔してる」
「違うわよ　私達、いつまでこの状態が続くのかなって・・・自嘲よ」
「本当？まあいいわ。信子、テーブルクロス取って。食器棚の右の引き出し、下の方に入ってる黒いの」

この日春江は、清水の件の報告と守谷行のお礼も兼ねて
「今晩、家で焼肉するから食べに来ない？」と、信子に昼の休憩の時電話を入れていた。
「いやねー春江、何、大事に仕舞ってるの？」
広げようとしたクロスの中に、下着が1枚小さく折りたたまれているのを信子が見つけると、春江はあわてて抱えていたホットプレートをテーブルに置いた。
「こんな所にあったのか」
下着を整理だんすの所定の位置に戻すと、春江は1人ごとのように言った。
「それって盗られたと思っていたパンティー？」
「盗られたとは言ってない。無くなったって言ったの」
「盗られたって言ったのは、私だっけ。という事は、彼が盗ったのはハンカチだけか・・ますます変態ね」
「どうして？」
「だって、春江って毎日下着洗濯するよね。下着とハンカチが並んで干してあって、下着には目もくれないでハンカチだけ持って行くのよ。もしかして彼ハンカチフェチ？」
「そんなのあるの？」
「パンストフェチとかあるんだから、ありえるんじゃない？この前、新聞で読んだわ。若い女性が1人で運転する車の後をつけて「オイル漏れてますよ。パンストで応急処置できますけど」って脱がせるの。それでボンネットを開けて直す振りをしながら、ポケットにしまい込んじゃう手口」
「へぇ」
信子はプレートの上に野菜を並べながら、話を続けた。
「後で調べてみて直した形跡が無いんで警察へ届けたんだけど、そもそも女の娘はメカに弱いからね。
彼もきっとその黄色いハンカチが何よりも輝いて見えたのよ。洗剤の香りの中にわずかに留める春江の体臭を感じながら（春江さん今

何してるのかな？お風呂かな？）なんて想像して、いちょうの木にしがみついてたんだわ」
「ちょっと、止めてよ。気持ち悪い」
言いながら、春江は信子の安っぽい妄想に吹き出した。信子は色合いのよくなったカルビを、さも満足そうに口に入れている。
「それはそうと、この前ネックレス持ってけばよかった。そうしたら返せたのに」
「守谷へ行った時？」
「違う　駅で待ち伏せされた時。守谷へ行った時は、たとえ持っていたとしても返せないな。尾行した事解るのもいやだし、ポストに入れて奥さんが不審に思ったら可哀想だしね」
「甘いなー　もっとがつんとやらなきゃ。いいじゃないそのまま貰っちゃえば」
「いやよ　いつまでも繋がりがあるみたいで」
「彼、まだ来てるわよ」
「うそ　何で知ってるの？」
「夕べ実家へ行ってね　飲んじゃったから泊まったの。春江居るかなと思って今朝千波湖通ったら、彼の車あったもの」
「火曜日以降電話も無いし、もう来てないのかと思ってた。1週間近く休んじゃったから、そろそろ走ろうと思ってたのに・・・明日、返そうかな」
「会うの？」
春江がすがるような目つきで、両手を胸で合わせた。
「えっ？私？」
「おねがい」
「しょうがない。　焼肉もご馳走になってるし、もう1回早起きするか」
その晩は、信子の繰り出すフェチの話題で盛り上がった。殆ど1人でワインを空けた信子だったが、翌朝
時間通りに現れた。ものの5分とかからず千波湖に着くと、清水の

車がいつもの位置に今日はフロントを湖に向けて停まっている。他に1台停まっているが、中には誰も居ない。信子は清水の車の横に同じ向きで車を止めると、シートを倒している春江からネックレスの入った封筒を受け取った。
「居る？」
「ベンチに座ってる」
信子はドアを開けると清水の方をもう一度見た。背を向けたままじっと湖を見据えている。ゆっくりと近づき、ワイパーに封筒を差し込もうとして手を伸ばしかけた時、車の窓が少し開いているのに気がついた。次の瞬間、シートを倒して寝ている男の子の姿が目に入った。男の子はじっと信子を見ている。
「誰？」男の子はそう言いながら体を起こした。
「パパに渡して」
信子は動揺を隠せないまま、窓の隙間から封筒を差し入れた。
「僕の？」
「そう」
他に誰のパパが居るんだ？と、内心思ったが、男の子は不思議そうに封筒を見ている。
「渡せば解るから」
そう言って、自分の車に戻ろうとした時
「いない」と声がした。続けて
「死んだ」とその子が言った。
信子の頭の中は混乱した。そこに立ち尽くしたまま、次にどうすべきか不毛な思考が頭の中を駆け巡った。
少なくとも今の言葉を聞いた以上、このまま車に戻れない事ははっきりしている。
その時、その子が窓の隙間に顔を寄せると、突然大きな声で叫んだ。
「圭介おじさーん」
その声に気づいた清水が車の方を見た。信子に気がつくと、ベンチを立って車道を渡ろうとしている。

信子は手を上げて清水を制すと、自分から清水の方に向かった。倒れた助手席に誰が居るのか、解ったかもしれない。それでも、出来るだけ春江に近づけたくないという気持ちもあった。あの男の子の前で、大人のいさかいを演じたくないという気持ちも働いた。
「春江に頼まれて、ネックレスを返しに来ました」
覚悟していたのだろうが、清水がそれに対する言葉を発するまで少し間があった。
「そうですか　でも、ネックレスは返してもらおうとは思ってません。要らなければ捨ててください。
ただ、最後にお話しだけさせてもらいたいんです。春江さんに会せて貰えないでしょうか」
男の子は封筒を手に車から出てきたが、2人の気配を感じ取ったのか、フロントグリルに体を預けて所在無さげに脚を動かしている。
「あの子は？」
「甥っ子です。兄の」
「ごめんなさい。私、あの子があなたのお子さんだとばかり思って・・・（パパに渡して）って封筒を
頼んだんだけど、（死んだ）って言われて・・」
「そうですか。兄は半年前に交通事故で亡くなりました」
信子はここに来るまでは、もし清水に見つかったら「あんた、最低ね。二度と春江に近づかないで」と
啖呵を切るぐらいの積もりでいたが、男の子が清水の子ではないと知った驚きとあの子に辛い事を言わせてしまった申し訳なさで、当初の意気込みは完全に消滅した。
「お願いです。ここに来るのは今日限りにします。話だけ聞いてもらえれば、それでいいです」
「ちょっと待ってて」
信子は車道を渡ると、遊ぶ物も無いアスファルトの上で小さい手でしっかり封筒を握り締めて信子を見つめている男の子に「ごめんね、もうちょっとだけ待っててね」と声をかけて車に戻った。

「春江、彼、今日で最後にするから話だけ聞いてほしいって。あの子、彼の子じゃない、お兄さんの子。
たぶん、彼、独身よ」
春江は、子供の「圭介おじさん」と呼ぶ声で、守谷で見たのはこの子だったのかと思っていた。黙って頷いて車を出ると、男の子に軽く笑顔を作って頭を一撫でした後ベンチへ向かった。
清水と目を合わせず黙ってベンチに座ると、清水も腰を下ろした。清水は一度春江を見た後湖に顔を向け直すと、一つ大きく息を吐いた。
「始めに、ずっと騙してきましたが僕の住んでいるのは守谷で、勤め先も同じです。1ヶ月程前僕は仕事で水戸に来ました。仕事が退けてから北口の居酒屋で酒を飲んで、店を出ると次の電車まで30分程時間があったので、北口広場のベンチで煙草を吸いながら時間を潰していました。そこに1人の女の子が泣きながら僕の前を通り過ぎました。女の子は「ママ」と何度も呼びながら、人ごみの中に母親を探していました。その時通りかかった1人の女性が女の子に気づいて、「どうしたの？」と優しく声をかけて女の子をベンチに座らせると、バッグからハンカチを取り出して女の子の涙を拭きながら話を聞いていました。その子は泣きながらも、「ここで座って待ってて」とお母さんに言われた事、そのお母さんが帰ってこない事を彼女に伝えました。「大丈夫、すぐ帰ってくるから。それまでお姉ちゃんと一緒にここで待っていようか」そう言って彼女はキャンディーを取り出すとその子の口に含ませ、「ほら、見て　このハンカチ可愛いでしょう。キティちゃん何人いる？」その子はまだひくひくしながらも、彼女の横でおとなしく座っていました。彼女の子供の扱いは幼稚園の先生のように手馴れていて、隣のベンチにいた僕はその光景を見ているだけで幸せな気持ちになりました。程なくしてお母さんが戻って来て、彼女は何度も頭を下げる母親と振り返りながら手を振る少女を見送ると、駅の方に向かって歩き出しました。スタイルの良いとても美しい女性でした。そのやり取りがあ

った後だけに、余計にそう映ったのかもしれません。こんな素敵な女性がいつも隣にいてくれたらどんなにか幸せだろうと、想像するだけで心が躍りました。しかしそれはあくまでも空想で、その人と僕には何の接点もなく所詮は手の届かない想いだと直ぐに現実に引き戻されました。

その時、今まで彼女が座っていたそのベンチの上に何かが残されているのに気がつきました。近づいてみてそれがハンカチだと解った時、僕は急いで彼女の後を追いました。もちろん渡すためです。彼女は駅の通路を抜けて南口の広場へ出ました。今の遅れを取り戻すかのようにかなり早足で、おまけに相当量の人が改札からはき出された直後で、僕は彼女に追いつくのに必死でした。南口の広場を抜けて彼女が地上へ向かうエスカレーターに乗った時、彼女を呼び止める事が出来ました。でも、僕はそうはしませんでした。彼女の背中を追っているうちに別の考えに支配されました。それを渡せば、あの女の子に向けた笑顔を自らに受ける事が出来る、それだけの事だそれ以上はありえない。「今の、女の子との接し方を見て心が惹かれました。できればコーヒーでも付き合っていただけませんか」仮にこう言ったとしたら、彼女の表情はいっぺんに硬直するだろう。身も知らぬ男がほんの数分のやり取りを見ただけで、こんなことを言うのだ。親切な男の印象が一瞬で忌むべき存在に変わる。親切ごかしでハンカチを届け、数倍の見返りを要求するインチキ野郎だ。僕は、彼女の後をつけアパートを知りました。8時を過ぎても灯りがついていなかった事で、1人暮らしかもしれないと期待しました。その事があってから、どうしたら彼女に近づけるかそればかりを考えるようになりました。そしてその週の土曜の早朝、僕は車で彼女の家へ向かいました」

そこまで一気に話すと、清水は煙草に火を点けた。信子は湖の方を指差しながら、男の子にしきりに話しかけている。水辺では何羽かの白鳥がまだやわらかい陽射しを受けて羽を休めている。

「7時過ぎに着いて、車の中から彼女の部屋を見張りました。もし

その日が出勤なら勤め先が解ると思ったのです。２０分ほどして、１人の女性が首にタオルをかけたスポーツウェア姿でそのアパートに近づいて来ました。そして彼女の部屋のノブに手をかけた時、やっとそれが彼女だと解りました。それからしばらく車の中に居ましたが、９時になっても彼女が出かける様子も無く通りも賑やかになりいつまでもその場所に居るわけにも行かなくなって、駅前のパチンコ屋やネットカフェで夜まで時間を過ごしました。車をパチンコ屋の駐車場に置いたままにして歩いて彼女のアパートまで行き、彼女の部屋の窓が正面に見える場所から部屋の様子を伺いました。何時ごろだったか女の人が１人訪ねて、１時間ほどで帰っていきました。他に人の出入りも無く、彼女が独身かどうか計りかねましたがその日はそれで帰りました」

春江は、その土曜日が信子の誕生祝をした日である事を思い出した。

「翌日、私は昨日と同じ場所に６時に車を停めました。彼女が朝ジョギングをするのは解ったので、もし今日もするのなら場所をつきとめようと思ったからです。３０分位してドアが開いて彼女が姿を見せました。そして車で後をつけて、千波湖の周りを３０分走る事を知りました。走るのは休みの日だけかもしれないという不安はあったものの、次の日から僕もそこで走る事を決めました。会社が９時からなので８時半に帰ってくることが出来ればぎりぎり間に合う、そう思って次の日から千波湖に６時半に着くために家を５時半に出る生活が続きました。最初の月曜日、彼女が１０分後に姿を見せた時は正直ほっとしました。走りながら僕は、彼女に何とか好印象を持たせようと考えました。何日か目には、僕が挨拶する前に彼女から声をかけてもらう事が出来ました」

清水は、一言も言葉を発しないでいる春江の身体越しに、人馴れした白鳥のすぐ近くまで寄って信子の話を上目遣いで聞いている甥っ子に目をやった。

春江はその日の事を思い出していた。泣きじゃくる女の子を何とかなだめようと１個あったはずのキャンディーを大慌てで探した事、

デパートのトイレにバッグを置き忘れた母親から丁寧に礼を言われた事、何度も振り返り手を振る少女の姿、その日春江は珍しく残業した。定時で帰れば少女と出会う事も無く、ハンカチを忘れなければ清水を惑わす事も無かったのだろう。

「いずれは僕が水戸に住んでいないことがあなたに解ってしまうと思いました。本当に僕が水戸に引っ越すか、守谷に引っ越した事にするかどちらかの選択をしなければと焦っていました。水戸に転勤を願い出る明確な理由も無く、その場しのぎで言ったアパートも後で調べてみたら全部塞がっていて、守谷へ転勤する形にするしかないと考えました。ただそれには、交際がある程度深まって僕が毎日水戸まで来なくてもあなたとの関係が保てる時まで待つ必要がありました。あまり先走って言ってしまうと、守谷から

ジョギングのために水戸まで来る事に逆に警戒されてしまうと思ったのです。2度目のデートであなたがネックレスを受け取ってくれた時、僕は話す事に決めました。」

春江は清水に聞きたい事がいくつかあった。しかし、聞くという行為自体が清水を許そうとしている様に思えた。ハンカチが盗んだものではないにしろ春江を騙していた事に変わりは無い。いちょうの木に隠れて部屋の様子を伺っていたのだ。信子には2度もつき合ってもらっている。「彼がストーカーだったら、この先の付き合いは絶対にありえない」とも言った。ここで清水を許す事は出来なかった。

「あなたを騙した事は、本当に申し訳ないと思っています。僕にもっと勇気があれば他の方法が取れたのかもしれません。でも僕にはこんな姑息なやり方しかできませんでした。許してください」

清水は膝に手をついて頭を下げた。春江は静かに立ち上がると何も言わずに歩きだした。

「済んだ？」

信子が声をかけた。春江は小さく頷いて男の子の頭を撫でると

「ごめんね、飽きちゃったわよね。もう、お話し終わったからね」

と膝を追って話しかけた。男の子は恥ずかしそうに顔を背けると、近づいて来る清水に駆け寄った。清水は男の子から受け取った封筒とバッグから取り出したハンカチを春江に差し出した。春江は首を振ってハンカチだけを受け取ると、信子を促して車に乗った。信子の車が駐車場を出る間、清水は甥っ子を前においてずっと頭を下げていた。

「どうなったの？」

「長くなるから、夜話す」

「お兄さんが半年前に亡くなったって聞いてた？」

「聞かされてない」

「ディズニーランドに行くのに、お母さんとお婆ちゃんと3人で泊まりに来てるんだって。お婆ちゃんって、彼のお母さんね。少しでも早く悲しみを和らげようとしてるんだろうけど・・・まいったなー私、あの子に「お父さんに渡して」って言っちゃったの。聞こえてた？」

春江は首を振った。1人で来ていたら、同じ過ちを犯していた。関係の無い信子に余計な重荷を負わせてしまった事に春江の心は痛んだ。

その夜夕食を済ませた春江は、コンビにで信子の好きなバニラアイスを2つ買うと信子の家へ行った。

「ふーん、そんな事があったんだ」

ひとしきり春江の話を聞くと、信子は作り置きのアイスコーヒーを春江のコップに継ぎ足した。

「どう思う？」

「春江はどうしたいの？」

「解らない」

「解らないってことは、許せるってことだよね」

「信子がどう思うか聞きたいの」

「正直に言うわよ。今朝彼と話してみて、真面目そうな人だなと思った。外見も素敵だし、春江とはお似合いよ。でも私はいちょうの

後ろの彼も知ってるから、イエスかノーかで言うとノーだね。事情は解ったけど、何ていうか男らしくないって言うか他にやり方があったんじゃないかな？」
「たとえば、どんな？」
「それはすぐには思いつかない。でも、もし私が彼の立場だったとして、単に素敵な男性を見かけただけじゃなくその人柄も見えてくるような関わりが仮にあったとしても、何もしないと思う。私だけじゃなく、殆どの人がそうだと思うわ。だってそれが大人でしょう？女の子の世話をする春江は、彼には天使に見えたのかもしれない。でもそれって特別の事じゃ無いわ。1人で泣いてる子供に気づきながら素通りする女性のほうが珍しいと思う。もし彼がその時お酒を飲んでいなくても同じ事した？街には素敵な人はいっぱい居るわ。時には心が動くときもある。だからっていちいち追い掛け回してたんじゃ世の中ストーカーだらけになっちゃうわ。誰もが自制しながら適当なところで妥協して生きているのよ」
「信子の言う通りだと思う。私も彼があのときの男だと聞かされてぞっとしたもの。ハンカチを忘れたから追ったというのは口実で、追おうとしたらハンカチが目に入ったんじゃないかって。お酒は言い訳にはならないけど、それだって本当に飲んでたかどうか解らないし・・今朝の彼の話が全て真実だとしても、後をつけて家を突き止めるなんて普通じゃないと思う」
春江はそこで言葉を切って、コーヒーをすすった。今の春江の同調を前置きと感じた信子は、煙草を抜き取りながら春江の次の言葉を待ったが、春江はその先を呑み込んだままで居る。壁掛けの時計の秒針の音が次第に大きくなり、たまらず信子が口を開いた。
「春江、私に遠慮しなくていいのよ。春江の本心を言って」
「私はただ信子とはずっと友達で居たいから、信子が軽蔑してる相手と付き合い続けるのには抵抗があるの」
「軽蔑はしていないわよ」
「だって、変態とか言ったじゃない」

「それは、知らなかったからよ。ねえ春江、春江は私の一番の親友だと思ってる。付き合う男は関係ないわ。春江が好きならそれでいいのよ。彼のことだって、私はほんの少ししか知らないし、自分の気持ちが大事よ。私のことは気にしないで」

翌朝、春江は千波湖に向かった。まだ時間は早いが出勤の服装に身を整えている。清水が居なければ駅のマクドナルドで時間を潰すつもりで居た。数台の車に混じって見慣れた車が停まっている。清水はいつものベンチに座り、湖の向こう側に立ち並ぶオフィスビルの方をじっと見ていた。春江はその横に黙って腰を下ろした。清水は春江に気がついて浮かしかけた腰を再び沈めると、少し決まり悪そうに言った。

「すみません2度と来ないって言っておいて。でも本当に今日を最後にしようと思ってました。今日、貴方に会えても会えなくても終わりにしようって、そう思って来ました」

「明日からは、本当に来ないでください」

「はい」

背後を足音が通過した。並んで走っているのだろう、時折話し声がする。春江はバッグから包みを出すと清水の横に置いた。

「食べて」

「これって春江さんのお弁当じゃ・・・・」

「いいの」

清水は昨日まで手にしていた、弁当箱を包んでいるハンカチをじっと見ていた。

「お腹すいてるでしょう?」

清水はハンカチを解いて、ふたを開けた。出し巻きをメインにレタスの上に一口サイズのから揚げとウィンナーが乗っている。

「お箸使っていいんですか?」

「口に入れないで、手前で放り込むの。出来るでしょ」

清水は玉子焼きをつかむと、口の手前で呼吸を合わせている。春江は堪えきれず吹きだした。
「冗談よ、使って」
清水は神妙な顔で、玉子焼きを口の中に入れた。
「それだけが、唯一の手作り」
笑わせようとして言った積もりだったが、熱いものを堪えているのかその表情の緩む事は無かった。
「私ね、夕べいろいろ考えてこう思う事にしたの。朝の忙しい時間を3時間も割いて1ヶ月近くも私に会いに来てくれる人って、この先一生現れないだろうなって。那須の時も東京も、一つも嫌な思いをせず過ごせた。私を大事に思ってくれているのがすごく伝わるの。だから、あなたが駅で私を追ったのはお酒のせいでも魔が指したのでもなく、運命を感じたからじゃないかって・・・」
清水の箸は用を成さず口だけがゆっくりと動き、ひとかけらの玉子焼きをいつまでも転がしている。
「まずい？」
清水はすかさず首を振った。
餌を探しているらしく、1羽の鴨が波紋を描いて水中に潜り数メートル先から顔を出す、先程からそれを何度と無く繰り返している。急に風が出てきて弁当箱を包んでいたハンカチが飛ばされそうになるのを、春江は必死で抑えた。ボート乗り場で、無人の白鳥ボートがぶつかりあって音を立てだした。
「すみません、なかなか喉に入らなくて。お友達待たせて大丈夫ですか？」
「えっ？」
清水は少し離れた駐車場に1台ぽつりと停まっている、信子の黒い車を指差した。春江は立ち上がると車に向かって両手を大きく振った。気がついたのか、車を清水と同じ駐車場に入れると大きな箱を抱えてやって来た。
「見つかっちゃったか」

「何時から居たの？」
「１０分くらい前」
春江は信子の座るスペースを空けた。
「いいわ　朝からこんな熱いところに居たら日中持たないから」
笑いながら言うと、代わりに可愛い包装を施した箱を置いた。
「これね、昨日甥っ子さんにひどい事聞いちゃったから、ほんのお詫び。車が好きだって言ってたから・・」
「受け取れませんよ、そんな事で」
「いいの、受け取ってくれないと私の気がすまないから」
「信子、それ何時買ったの？」
「昨日」
「昨日って、私が行く前？」
信子は頷いた。
「玉子焼きか？清水さん、春江の玉子焼き不味いでしょう？」
「何言い出すのよ」
「春江って料理上手だけど、玉子焼きだけはやたらと甘いんだよね」
「甘いほうが美味しいじゃない」
「甘さにも限度があるわよ。ね、清水さん」
「ちょうどいいです」
「やっぱり、そうくるよね。さあ、邪魔者は消えるか。清水さん、春江の事大事にしてね」
最後のところだけ真顔で言うと、信子は風に煽られる後ろ髪を気にも留めず駐車場に向かって歩き出した。
「いい人ですね」　清水がぽつりと言った。
春江はそれには答えず、信子の後姿を目で追った。
後、数日で祭りが始まる。
やはり今年も、信子と一緒に行こうと考えていた。

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2548q/

恋人はストーカー

2011年1月26日04時33分発行